
伝授

器用貧乏

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

伝授

【Nコード】

N3950W

【作者名】

器用貧乏

【あらすじ】

子供に教えられることもある。

僕は釣りを趣味としているが、全く釣れないので周りの皆からは『魚にエサを上げる男』と揶揄されている。あはは、と笑顔で返すのだが、さすがに気分は良くなく何とかして見返してやりたいと思いい師と仰ぐ存在を探していた。

それはごく身近にいた。今年7歳になる息子である。

息子は何故かよく釣るのである。大きい竿は買い与えていないので釣れる魚のサイズはたいしたことはないのだが、それでもこちらが羨むほど釣れるので周りの皆からは『トンビがタ力を産んだ』と揶揄していた。息子を師と仰ぐには若干の抵抗はあるものの、コミユニケーションが取れてさらに釣果も上がれば言う事は無い、と捕らぬ狸の皮算用をしてほくそ笑んでいた。

「師匠、竿はどのようなものを選べばよいのでしょうか？」

長さ、仕様それぞれの竿を並べて息子の言を待つ。

「竿なんて関係ないよ。俺、竿これ1本しか持ってないし」

息子は愛用の千円前後の竿を取り出してニヤリと笑った。竿は関係ないのか…。

「エサはどれにしようか。ゴカイでも買おうか？」

自分が普段使用している市販のエサの名前を挙げる。しかし息子は首を縦に振らない。

「お父さん、普段からそんなもつたいたいことしてるの？エサなんて近くの山で取れるミミズでいいじゃん」

ここでも軽く叱られてしまった。まあ息子に多額の小遣いを渡しているわけじゃないので、ゴカイを買うお金が無いというのも理由かもしれないが。

「じゃあ次の日曜日、いつもの海岸で待ってるから」

「えっ！一緒に行かないの？」

当然一緒に自転車で行くものと思っていたので、意表を突かれ声

が裏返った。

「一緒なわけないじゃん。お父さん支度するの遅いし。それに…、一緒に行く俺の『釣り運』を吸い取られそうで怖いもん」

さりげない口調で父の尊厳を傷つけてくる。事実そうなので何も言えなく、ググツ、と唸り声を上げる。近くにいる妻が声を上げて笑っていた。

日曜日。息子が指定した場所へ行ってみると、すでに竿は海に向かって垂れ下がっており、浮きが波間をユラユラと気持ちよさそうに漂っていた。

「遅いよ、お父さん。待ちくたびれちゃった」

頬を膨らましている息子の横に置かれているバケツには、すでに4、5匹の魚が所狭しと泳ぎまわっていた。今日も調子は良さそうだ。

「では、師匠よろしくお願いします」

セッティングし終わった後息子に話しかけた。息子もその気になって「うむ」などと言って近づいてくる。

「何釣りたい？この前はここでタコを釣ったんだよ」

タコかあ…、魚じゃないけど釣り甲斐はあるよな。夕食の食材にもなって妻も喜んでくれるだろう。「じゃあタコをお願いします」と頭を下げた。

すると、おもむろに息子が準備体操を始めた。手首足首の間接をほぐしたりしている。何する気だ？

「まず手を伸ばして…、フニヤフニヤさせます。タコのように。そして足もこのように…」

息子がタコの真似をし始めた。クネクネし続けている息子の異様な状況を飲み込むことが出来ず硬直した。

「な、何してんの。釣り…、するんだよね？」

「まずタコの気持ちになるんだよ。ほら、お父さんも早く!!」

えっ!?!これ俺もやるの？

息子の動きが急かすように加速する。何故か俺もやらなければいけない雰囲気漂っている。釣りとは全く関係ないが息子の為だ、やむを得まい。

息子の動きを真似して、手と足をタコの足のようにクネクネフニヤフニヤと動かした。周りの人は「何してんの、あれ？」という怪しげな目を向けている。タコの真似が出来ているかどうかは定かではないが、恥ずかしさの余り顔が真っ赤になって茹でダコになっていることは間違いないかった。

「お父さん、クチ、口！こうやって尖らせないとタコにみえないよ！」

さらに父にタコの完成度を要求する息子。もうどうにでもなれ、という気持ちで口を尖らせ、さっきよりも増して手足をクネらせた。手足の動きと反比例するように、周りから人の気配が——危ない親子と捉えられたのだろう——消えていった。

しばらくの間、二匹のタコもどきが陸上に存在していたが、もうこれ以上周りの視線に耐えられん、と息子にギブアップを宣告しようとした時、竿がピクツと動いた。

「きたあゝ！！」

息子が叫んで竿を指差す。ハッ和我に返った俺は、タコの足……じゃない、自分の手で竿を掴み、リールを巻く。

「きてる、きてますぞおゝ！！」

と久しぶりのヒットに奇声を上げた。この感触、手応え……、これで俺も『エサを上げる男』の称号は返上だ。などと思って竿を操っていると、急に抵抗が無くなり、引き上げると針もエサも無くなっていた。あまりに勢いよく引きすぎたために糸が切れてしまったのだ。

「あゝあ、何してるんだよ。タコの気持ちになって上げなきゃダメじゃん」

竿を持っているときもタコの気持ちを要求されようとは……。そこまでしてタコを釣りたくない。

「今のタコだった？」

息子に聞く。

「いや、タコじゃないね。銀色がキラキラしてたから。」

海中に映った魚影を冷静に見極める息子の眼力に感心しつつ、タコ踊りが何の効力も示さなかったことに脱力した。

「まあこんなこともあるよ。次は何狙う？まだ、タコ狙う？」

息子が何事も無かったかのような口調でタコへのリベンジを求めてきた。いやだ…、嫌すぎる。今度踊りだしたら、それこそ警察を呼ばれかねない。

「い、いや…。今度は無難にアジでも狙おうかな。は、はは…」

引きつった愛想笑いを返した。

「アジかあ…、すぐ釣れるから面白くないんだよなあ。まあいいや、お父さんの頼みだし」

と言いながら再び手足の準備体操を始めた。嫌な予感がして寒気が襲ってきた。

竿を海に放り込んだ後、息子が急に手をバタバタさせて走り出した。タコの件が頭をよぎる…。

「今度は何？なんで両手をバタバタさせてんの？」

聞かずにはいられない。避けられない災難であつたとしても。

「アジの真似だよ。アジは速いからね、全速力で走らなきゃ。手はヒレの真似だよ、アジは速いから手も力強くバタつかせないと」

目一杯の力で走ってバタつかせている息子を黙って見ていたが、しばらくして息子から指導を受けるハメになる。

「お父さん、何してんの！？早く後を追っかけて来てくれなきゃ。

群れで行動するんだから、アジは」

やはり来たか、地獄の時間帯。ある意味仕事より精神がやられるかもしれない。しかし、ノーという選択肢はない。俺はアジになるしかないのだ。

腹をくくり、手をバタつかせて息子についていく。走る範囲は広く、他の釣り客の前も平気で通過した。釣り客は当然の如く視線を

逸らす。お父さんアジは今にも泣きだしそうになった。

しばらく走った後、持ち場に戻ると息子の竿に反応があった。息子はそれに気付くと、サツと竿をに手を掛けて慣れた手つきでリールを巻き、アツという間に一匹釣り上げた。

「うーん、ちっちゃいなあ、お前。もつと大きくなりな」

ちゃんとキャッチアンドリリースも心がけているとは師匠恐るべし！と感心しながらも自分の竿には何の反応もなく、さらに引き上げてみるとエサも取られている様子。これじゃ、今までと何にも変わらないよ。

「もう日も暮れてきたし、帰ろうか？」

そう言つと息子も頷き、竿を片付け始めた。はあ、結局今日もボウズか…。

トボトボと駐輪場に向かう父と息子。息子はいつもの通り釣果があり嬉しそうだ。バケツの中で泳いでいる魚を見ては微笑んでいる。「結局釣りに王道なんてないのかもな…」

はあ、とため息をつく。すると後ろから追っかけてきた息子がその独り言に反応した。

「な」に言つてんの。釣りつて楽しいからしてるんでしょ？釣れても釣れなくても楽しいじゃん。それにそんなしかめっ面してたら魚も寄ってこないよ。お父さんに足りないのは『笑顔』なんじゃない？」

その言葉にハツとして振り返る。息子はニッコリと笑っていた。

夕陽が息子の背後で朱の輝きを放ち、後光のように見えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3950w/>

伝授

2011年9月4日03時38分発行